

ガナナート・オバーサーカラ著

『パッティニ女神の祭祀』

Gananath Obeyesekere, *The Cult of the Goddess Pattini*,
University of Chicago Press, 1984, 629pp.

渋谷利雄

本書は、三〇年間にわたるスリランカ西南部のパッティニ儀礼をめぐる実地調査と、文献研究の成果である。著者はスリランカ出身のシンハラ人で、現在アメリカのプリンストン大学人類学教授である。スリランカのシンハラ社会を対象に、実地調査を基礎にした地道で手賢い仕事を続けており、すでに多くの著書、論文を発表している。テーマは、土地制度、伝統医療、民衆宗教、反乱と多岐にわたっている。なかでもパッティニ祭祀は、著者が修士論文以来追求してきたテーマである。

本書は六部から構成されている。第一部は、スリランカにおけるパッティニ信仰の社会文化的、歴史的背景について述べている。まず歴史的パースペクティヴから、西南部

(現在の西部、南部、サバラガムワの三州)の特性が明らかにされる。一三世紀まで政治的中心となり、人口が集中していたのは北部および東南部(乾燥地帯)であった。しかしその後、一五世紀にコロンボ近郊のコーッテに都がおかれるなど西南部(湿潤地帯)への大規模な人口移動が行なわれたため、この地方こそシンハラ文化の伝統を継承していると述べる。また、パッティニ、ヴィシヌス、サマン、ナータなど主要神の中心的神殿が集中していることから、この地方の重要性が指摘される。

次に、シンハラ人の象徴世界の構成について説明する。仏陀はすでにこの世には存せずニルヴァーナにあり、現世には全く関与しないとされる一方、神々の王、宇宙の支配者

として現世に絶大なちからをふるう存在である。仏陀は超越神として、神々、星神、悪霊、死霊など、あらゆる超自然的存在を統轄する。超自然的存在も人間同様、ニルヴァーナをめざすものとされている。パッティニ女神は徳が高く、有力な仏陀志願者である。こうした象徴世界のもとでパッティニ女神は、病氣予防・治療、雨乞いに効験があるとして信仰されてきた。

第二部では、シンハラ社会で広く行なわれてきたパッティニ儀礼ガンマドゥワ(gamaduwa)でうたわれる詩歌(神話)が、著者の収集資料から全訳、解説される。この儀礼は、稲の収穫後あるいは日照りや伝染病の流行の際に、一カ村から数カ村が出資してパッティニをはじめとして神々に奉納される。神々を慰撫し、災厄を祓い豊穣を祈願するためであり、村人にとっては娯楽でもある。数多くの儀礼、儀礼劇から成り、ゴイガマ(農民)に属する祭司とベラワー(鼓手)によって演じられる。三婦五戒を唱えたあと、祭司と鼓手が食事する。ほら貝を吹き、演舞場にしつらえた祭壇に灯明やビートルの葉を献納し、聖柱を立てた後に開始される。神々の招来に始まり、遠大なパッティニ神話が次々に演じられ、神々を送って終わる。ガンマドゥワは、パッティニ神話のタミル語テキストから翻訳されたと考えられるシンハラ語テキスト(詩歌集)に依拠して演

じられる。

第三部では、シンハラ語テキストに含まれているとはいえない今日のガンマドゥワでは演じられなくなっている、チョーラ国の善王とバーンディヤ国の悪王の物語、およびガジャバーフ(Gajabahu)王の物語を取上げる。チョーラ国民を呪いによって苦しめるバーンディヤ王に対し、チョーラ王は人々を救う正義の王として描かれている。著者はここで、この二つの王権のモデルは、ヒンドゥー教的神的・宇宙的王権と仏教的な公正王の觀念に由来すると解釈する。ガジャバーフ王は、スリランカの歴史書では、チョーラ国に遠征してパッティニ祭祀をスリランカに伝えた人物として描かれている。この王は、タミル語の叙事詩で綴られたパッティニ神話『シラパディハーラム』にも記されていることから、南アジア史の研究者の間では時代考証の規準に用いられてきた。しかし著者は史料を詳細に検討して、ガジャバーフは神話的存在であり、ケーララからの移住者によるパッティニ伝来を説明するための創作であると述べ、神話的事実と歴史的事実を混同しているとして歴史研究者を厳しく批判している。

第四部は、アンケリヤ(ankeliya)と呼ばれるパッティニ儀礼の記述にあてられている。まず儀礼を、まじめで、統制的で、神聖な“ideal representations”と、卑俗でわい

せつな“catharsis”に分類し、ガンマドゥワは前者にあたり、アンケリヤは後者に相当すると述べる。アンケリヤでは、パッティニとその夫に見立てて村が二チームに分けられる。シカの角あるいはカギ状の枝を二つ組合わせて引合い、相手を折った方が勝ちとなる。勝者は敗者にわいせつな詩歌を浴びせて嘲笑する。これを十数日続けた後に神殿に食物を献納し、会衆が共食する。

第五部では、以上に紹介した資料に基づいて、パッティニ信仰を分析している。著者の方法は、フロイトの理論に依拠した精神分析であり、主要な心理的問題を表現するシンボルとしての“projective system”の観点から考察する。著者のねらいは、“ideal typical”パーソナリティを導き出すことである。

まず女神信仰について、バラモン的伝統のインドと仏教的伝統のスリランカの間の相違をみる。女神のイメージが、インドでは母的なものと悪神(カリー女神)的なものから成るが、スリランカでは母および妻的イメージであること指摘し、それは家族形態に密接に関連しているとする。すなわち、インドの合同家族制と異り、スリランカの核家族制は、結婚後の母親からの別居が男性をして妻に母の役割を求めさせる。しかし、実家と強い絆をもつ若い妻はこれに応えることができない。こうした男性の願望が、スリラ

ンカの女神のイメージに投影されている、と著者は把える。次に、処女、妻、母というパッティニの役割の矛盾が、いかに解釈されているかをみる。これは、パッティニ神話(タミル語、シンハラ語)に共通してみられるテーマー処女、売春婦、移り気な夫ーの考察を通して明らかにされる。すなわち、パッティニに対して夫は不能であるが、売春婦とは交渉をもつ。こうして妻でありながら処女であり続けるが、母としての役割はただ女神であるゆえに母であると述べる(母も女神もともに“amma”と呼ばれる)。

最後に、アンケリヤを通して儀礼的カタルシスの問題を論じる。うたわれる詩歌のわいせつな内容(義母との性交、肛門性交)は儀礼のテーマとしての豊穣性に関連するだけでなく、男性の心に潜む不能と去勢の恐怖の投影でもあると把える。さらに、排泄物が悪態として使用されるのは、シンハラ社会での幼児期のしつけの厳しさや恥の觀念に由来すると述べる。こうして、ぜい弱な自尊心とその裏返しとしての自尊心の誇張、恥の社会性(嘲笑への恐怖)といった、シンハラ人とシンハラ文化の特性が導き出される。

第六部では、西アジアの女神信仰が南インド・ケーララに伝えられ、さらに北インドおよびスリランカへと広がったという仮説を提示する。まず、現存する最古のタミル語神話『シラパディハーラム』と『マニメーハライ』(とも

に五・九世紀に編纂されたといわれる)を検討し、パッティニをヒンドゥー女神とする通説をくつがえし、ジャイナ・仏教的な女神であると述べる。当時のジャイナ教および仏教の担い手は貿易商人であり、彼らの交易路により西アジアの女神信仰が南インドにもたらされたとする。スリランカへの伝播は、八世紀以降インドでのヒンドゥー教の再興に押されたケーララからの移住者(仏教徒)によると推論する。

以上のように本書は、人類学だけでなく、歴史学、宗教学、精神分析学の成果に依拠するとともに、長大なテキストおよび長年にわたる実地調査を土台にしている。論じる範囲は、紀元前後から現在まで、西アジアからインド、スリランカに及ぶ遠大なものである。こうした時空のコンテキストにとらわれないアプローチが、著者に奔放な想像を可能にさせ、多くの興味深い仮説(解釈)を提示させている。庄巻はやはり、パッティニ信仰の西アジア起源説である。歴史学、考古学、宗教学などの分野からの反応も楽しみである。大いに論争され、検証されていくことを期待したい。また『シラパディ・ハラム』の新解釈や、歴史的事実としてのガジャバーフ王の否定も、南アジア研究に波紋を投げかけるであろう。

こうした著者の想像力にふれて我々が学ぶべきことは、

資料に振り回されないためには解釈者は想像力をたくましくしなければならぬということである。いずれの説も周回な文献資料批判を経て提示されており、この点は、早くから文字が使用され、いわゆる歴史資料の豊富な文化、社会を研究対象とする人類学者にとって留意すべきことである。評者は本書を、人類学者による歴史学者との対話の試みの一つと理解する。

しかしながら、著者の方法にも難点がないわけではない。たとえば、悪態や恥の觀念のネガティブな側面を描き出せても、そのポジティブな側面——シンハラ人の風刺、だじやれ好みなど——は問題の指摘にとどまっている。スリランカ高地のパッティニ祭祀に関しては、儀礼的伝統が異なるとして初めから除外している。高地のパッティニ信仰の様態・特性と、西南部との相違については、全くふれていない。著者の分析モデルに「不適」なためであろうか。ここで詳細に比較考察する余裕はないが、高地のパッティニ儀礼ソカリ(sokari)に関心をもつ者として、評者は一点だけ指摘しておきたい。それは、高地ではパッティニ女神に対するパロディが発達したことである。たとえば、本書で強調された女神の純潔性(処女性)に対し、儀礼劇ソカリでは、パッティニの化身ソカリ・アンマは墮落し、多くの男性と性的関係をもち、出産する。こうした手法は逆に、

パッティニ女神の厳格なイメージを浮彫にさせる(拙稿「スリランカの儀礼劇ソカリ」『史苑』四四巻一号一九八五年、参照)。これは著者の精神分析ではどのように解釈されるのであろうか。また、特定の時空のコンテキストに依拠しないために、パッティニ儀礼のシンボリズムと具体的な社会変化との関連は、射程に入りにくいと言わざるを得ない。

(青山学院大学講師)